

開設 山田競馬場

1 山田競馬場

山田競馬場の開設

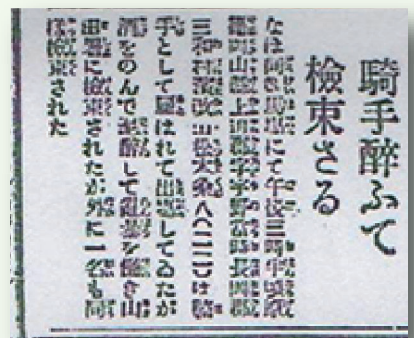
1927年（昭和2年）の地方競馬規則公布に伴い、全国の地方競馬のルールが統一されました。現在の馬券とは異なる『投票券付入場券』の販売が認められ、競馬が盛んになっていきました。その中で、1927年の春に、株式会社愛馬協会により『山田競馬場（馬場1周800m）』が開設されました。なお、実際に山田競馬場を運営していたのは、高知県畜産組合連合会になります。



3 山田競馬場

競馬開催日の様子

観衆は徒歩、荷馬車、牛車、自転車、バス（当時、山田町周辺は香陽バス運行）、汽車（当時、高知～山田間が高知線が開通）などで来ていたようです。騎手の中には、酒をあおった勢いで騎乗する者もいたようで、コーナーでは馬も廻るが、騎手の酔いが先に回っていたこともあったようです。レース構成は、1日10レース、レース当たり4頭立てから8頭立てのトーナメント戦である。3日間の開催で、初日が予選、2日目は準決勝、最終日は前日の着順別に特甲、特乙、丙に分けた各級の決勝です。



▲土陽新聞記事

2 山田競馬場

山田競馬場があった場所

現在、山田競馬場の名残は町のどこにも見当たりません。香美史談会の高田俊祐さんが当時のことを少しでも知る方に聞き取りを行い、競馬場の位置を推定したものが下の図です。聞き取りの結果、競馬場の周辺にあった観覧席、本部、入場券売り場、厩舎などの場所も想定されています。



▲作成者：高田俊祐さん(香美史談会)

▼下図は、山田競馬場が廃止された後の図面です。当時の桑畑の形状は四角形になっていることが多いにもかかわらず、楕円のような形になっているのは競馬場があったことを現しています。



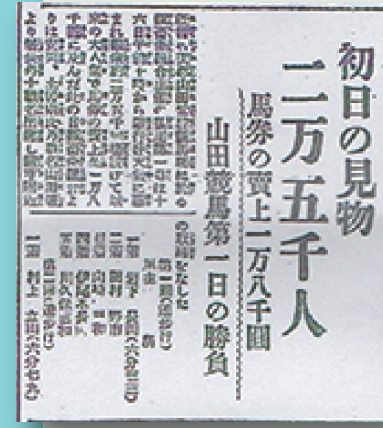
▲昭和9年発行「山田文化小史」掲載図

4 山田競馬場

売り上げと入場者数

馬事文化研究家の長山昌広さんによると、当時の地方競馬での売り上げ順位は、1位東京羽田競馬場、2位旧高知（棧橋）競馬場、4位山田競馬場であり、高知県内の二つの競馬場が上位を占めています。一例として、昭和2年12月、山田競馬場で3日間開催されたときの売り上げと入場者数は次のとおりです。

	馬券売り上げ	入場者数
初日	1万8000円(現在価値：約1144万円)	2万5000人
2日目	2万1000円(現在価値：約1335万円)	初日以上
3日目	6万2000円(現在価値：約3943万円)	3万人



▲初日に関する記事(土陽新聞)



▲2日目に関する記事(土陽新聞)